

## Robert Frost の初期の詩に 見られる家庭生活

山 田 武 雄

### 〔1〕

Robert Frost が祖父から New England の West Derry に小さな農場を買ってもらったのは 1900 年の秋、彼が 25 才の時であった。以後 9 年間、彼はこの農場で農業のかたわら詩作した。彼の初期の詩集が次々と出版されたのは、なお 10 余年後のことであるが、これらの詩集に見られる作品の多くは、この頃に書かれたものか、着想されたものである。<sup>1)</sup> 従って、この農場生活は彼の初期の詩を特徴づける原因となっている。

農場生活は自然現象によって大きく左右されるので、常に自然を冷静に観察し、判断する力を要求する。この農場生活によって育てられた観察眼を通して、Frost は New England の自然と人間の生活を観察し、検討したのである。初期の Frost は、この考察の課程そのものから美しい抒情詩や劇的な会話体の詩を生み出したのである。

特に家庭生活を描いた作品が多く見られるのは第二詩集の *North of Boston* (London: David Nut, 1914) と、第三詩集の *Mountain Interval* (New York: Henry Holt, 1916) である。この第三詩集の出版と同

1) Lawrance Thompson (ed.), *Selected Letters of Robert Frost* (New York: Holt, Rinehart and Winston, Inc., 1964), p. 31.

年に Frost は米国の芸術院である The National Institute of Arts and Letters の会員に推挙されている。以後、詩作が一時とだえ、次の第四詩集が出版されたのは数年後である。

上記の二つの詩集は New England における生活の観察と、それに対する考察によって特徴づけられている。彼は日常生活の身近かな問題ととりあげており、これらの詩集には realistic な描写が多く見られ、New England 特有の風物が見られる。例えば、有名な “Mending Wall” は春になると何時の間にか崩れている石垣の観察から始っている。この石垣を両側から積み直すのは New England 特有の方法であって、そこに住んだ経験がないとわからないことである。<sup>2)</sup> つぎに Frost は垣直しと一緒にしている隣人の観察に進み、さらに隣人が主張する親譲りの格言、“Good fences make good neighbors.”<sup>3)</sup> を提示する。しかし、この格言に対する Frost の考察の結論は明確に示されず、暗示にとどまっている。従って、読者は人間が作ったあらゆる種類の「壁」についてまで発展させて考えなおして見るのである。けれども、読者にそのきっかけを与えているのは New England 特有の石垣なのである。

New England は農業には、あまり適さない風土である。Frost の努力にも拘らず、農産物は自然現象によって大きく増減されたことであろう。農業のかたわら自然と人間の生活を鋭く観察していた Frost が自然の営みと人間の営みは相対立するものであるばかりでなく、自然の営みはいやおうなしに人間をまき込んでいることに注目し、New England の生活に潜む本質を次第に、「自然との戦い」という点から考察するようになって

2) Amy Lowell, *Tendencies in Modern American Poetry* (New York: Houghton Mifflin Company, 1917), p. 94.

3) Robert Frost, *Complete Poems of Robert Frost* (New York: Holt, Rinehart and Winston Inc., 1962), p. 48.

たのは当然のことと考えられる。ここで「自然との戦い」というのは、天災などの自然の暴力との戦いばかりでなく、人間が住む場所としての自然を出来るだけ利用しようとする人間の努力も含む。これは自然と人間の本質的な関係であるから、この戦いの考察は両者の純粋な姿を提供する。また、この戦いのため人間は互に力をあわせなければならない。ここに生れる人間関係は、最も純粋な本源的なものである。この人間関係が人間性の弱さや悪のために、ゆがめられている姿が「自然との戦い」を通して見る時、はっきりと写しだされる。従って、人間関係の中心を占める家庭生活も、「自然との戦い」と人間の協力を通して見る時、明確に観察される。これが Frost の初期の詩に家庭生活を描いた作品が多く見られ、それらが重要な位置をしめている理由である。また、このような作品は人間と自然、人間と人間、男と女という関係を通して観察されたものであるから、両者の立場や考えの相違をはっきりと表わすために、対話体や独話体の詩が多く見られる。

このようにして、Frost は New England の表面的な観察にとどまらず、鋭く人間の生活の本質へと迫っていったのである。従って、彼の描いている世界は表面的には New England であっても、ある象徴性を持った詩的世界となっている。以下の各章において、この詩的世界での生活の中心となっている家庭生活を検討することによって、Frost の詩的世界と初期の彼の思想を考察して見たい。

## 〔2〕

Frost の描く New England は農村社会である。農民達は多くの場合、人里離れた自然の中に住んでいる。彼の詩には森や雪の中に、ただひとり

でとり残されている人々の姿がしばしば描かれている。このような世界において、家庭が置かれている環境と家庭の大切さを見るために“The Hill Wife”と“The Death of the Hired Man”の二つの詩を調べて見よう。

“The Hill Wife”は5つの短詩、初めから順に“Loneliness”, “House Fear”, “The Smile”, “The Oft-Repeated Dream”, “The Impulse”からなりたっている。山の中に住むひとりの妻が日常の家庭生活の孤独に耐えきれず、突然に失踪するまでの環境との戦いが劇的な段階を追って描かれている。

まず“Loneliness”に於ては、この夫婦がいつも取り囲まれている自然の営みに対して、あまりにも感情的になりすぎている姿が妻の言葉として描かれている。彼等には、小鳥が秋に飛び去って行く時の鳴き声は、別れを告げているように聞え、必要以上に悲しみ、小鳥が帰ってくると反対に、彼等はとても喜ぶ。これは彼等が自然の中で非常に孤独なので、感情的になりすぎ、いつも彼等をとりまいている環境の変化に、自分達も巻き込まれてしまっていると感じるからである。このように感じるの間違いだと思いつつも、彼等はいつのまにかこのように感じるようになってしまうのである。ことに小鳥が去る季節を前にして、このような環境におかれると、肉体的に劣る女性にとっては、精神的な圧迫を受けるのは避け難いことであり、人間性の弱さをはっきりと示している。

“House Fear”に於ては、妻の孤独感は恐怖に発展している。この夫婦は常に孤独感に苦しめられているので、いつも一緒に外出することになっている。この二人は、夜中に真っ暗な家に帰ってくると、家の中に何かがあるのではないかといつも恐れる。それで彼等は家の鍵をがちゃがちゃならして警告を与えてからでないと家に入れなくなっている。彼等は彼等の感情に敗けてしまっているため、少しの不安でも、すぐ恐怖へと発展

するのである。

“The Smile” では、ちょっとした懸念が他の恐怖を生み出している。この夫婦の家へ浮浪者が物乞いに來たので、妻はパンを与える。その時の浮浪者の笑いが妻を苦しめる。彼は二人が貧乏なのを笑ったのかもしれない。彼等の貧しい生活を見られるのが困るので、パンを取られると言うよりはむしろ、妻の方から与えるようにして追い払ったのを笑ったのかもしれない。彼等が年をとった時のことを想像して笑ったのかもしれない。このように、妻の不安は次第に恐怖へと発展し、ついに、彼がまだ森の中から覗いているかもしれないという恐怖症にとりつかれる。前の二つの詩に見られた段階においては、夫も妻も程度の差はあっても、大体同じ反応を示しているが、この詩に至って妻は夫とは違って、病的な反応を示している。これは妻が夫よりも肉体的に劣っているからばかりでなく、見られている、そうして他者と比較されているという意識は妻の虚栄心と劣等感から生れたものでもある。ここにも人間性の弱さが顔を覗かせている。Frost の初期の詩に見られる家庭は、このようにきびしい自然の中にとり残されていると同時に、他人の目が存在するのである。このことについては、“The Housekeeper” を検討する時にもう少し考えてみる。

以上に見たような孤独感や恐怖感はますますつって、“The Oft-Repeated Dream” では、妻は夢でも苦しめられるようになる。暗闇に黒々とした大木の枝が風にゆれ、窓のかんぬきをはずそうとするかのように絶えず窓を叩く。このような室で寝ている妻は樹が何か恐ろしい危害を彼女に加えようとしている夢に苦しめられる。実際には、そういう事は起らないという事を知りながらも、このような夢の恐怖からのがれられないのである。これは大木によって代表されている自然が人間を精神的に圧迫しているからである。

Frost の初期の詩には自然の美しさを讃美した抒情詩があちこちに見られるが、それと同時に自然の暴力が人間を苦しめている様子が冷静に観察されている。例えば “Storm Fear” では、猛吹雪に閉込められた一家が恐れ慄いている姿が描かれている。この詩では人間に敵意を抱いているとさえ思える自然の暴力に対する人間の無力さが強調されている。また、“The Mountain” に於ては、山が人間を風から守る壁となっておりと同時に、人間の発展を妨げる壁となっている様子が観察されている。つまり、Frost の描く世界の住民達の日常生活は、自然の暴虐との戦いであると同時に、自然美を鑑賞したり、山を防風壁としたりして、自然を出来るだけ利用しようとする努力の連続である。しかも、この自然は “Snow” において牧師の Meserve が “Our snow-storms as a rule/Aren't looked on as man-killers....”<sup>4)</sup> という如く、表面的には人間に危害を加えないように見えているのであるが、人間とは比較にならないほどの暴力を常に秘めているのである。自然の暴力は、いつ襲ってくるかもしれないので、人間は常に備えていなければならないのである。“The Hill Wife” に見られる妻は、このような自然の圧力を常に肌を感じ、強迫観念につきまといわれるようになったのである。

以上のような環境に対する肉体的精神的な反応を経て、妻は “The Impulse” でついに失踪する。二人には子供がなく、家での仕事も少なく退屈なので、彼女は夫と一緒に農作業に出かける。しかし、夫のように肉体労働が出来ないので、彼女はやはり退屈で孤独である。森の中をさまよっている時、夫の呼ぶ声が微かに聞えるが、彼女は衝動的に隠れ、夫から逃げ出す。このように突然に、しかも簡単に、何らの知的な考えもなしに、彼等の家庭は崩壊してしまう。妻の失踪の原因は自然の圧迫の前に肉体的精神

---

4) *Ibid.*, p. 188.

的に敗北したことにありと考えられる。彼女は「自然との戦い」を続けて行くために必要な人間性の弱さとの戦いにも敗けたのである。また、妻の失踪は苦悩している妻に対して夫が何も精神的に援助してやらなかった事に対する精一杯の反抗でもある。しかし、妻は夫に対して積極的に援助を要求していない。このような妻の失踪後の生活は、既に「自然との戦い」に敗北してしまっているので、いっそう苦しいものとなるのは確実である。この夫婦は彼等の住んでいる世界、自然がたえず人間を肉体的精神的に圧迫している世界では、いかに家庭生活が大切なものであるかを知っていなかったのである。

家庭生活の大切さは、劇場で上演されたこともある劇的な対話詩 “The Death of the Hired Man” に於て考察されている。農夫の Warren がある夜、家に帰ってくると妻の Mary は老作男の Silas が戻ってきたことを告げる。Mary はこの老作男を優しく受入れてやるべきだと主張し、彼がやせ衰えている様子、死ぬために帰って来た事を説明する。ところが、夫はこの老作男が農繁期にはいつも、より支払いの良い他の農場へ行ってしまう義理のなさや、彼の無能さを非難する。この詩は、この老作男を受入れてやるべきかどうか、という夫婦の議論を通して展開され、その議論が進むにつれて、実際には登場しない Silas の孤独な姿を浮びあがらせてくる。そうして、Mary が夫を説きふせた時、Silas を見に行った夫が彼の死を告げるのである。

Frost の描く New England の農夫達は “The Code” に見られるように、仕事が出来る能力に対し、次のような強い自信と誇りを持っている。

The hand that knows his business won't be told  
To do work better or faster—those two things.<sup>5)</sup>

---

5) *Ibid.*, p. 91.

仕事が出来た能力は、即ち自然の暴力と戦う能力のことである。従って、農夫達にとって自分の仕事を悪く言われることは、自然と戦う能力がないと言われていることであり、自分の存在価値を否定されることになる。そこで“The Code”に見られるように、自分の能力を確信する自尊心が犯されると、その復讐として相手の生命を奪うほど残酷な肉体上の制裁を加えるという慣習法を生み出すのである。このような強い自尊心は、同時に強い独立心を育てる。従って、彼等の協力は必要な時にのみ行なわれる。彼等の協力は合理的であると同時に、利己的である。この利己心が、もともと「自然との戦い」に必要な人間の協力を妨げ、自分本位の考え方を身につけさせるのである。彼等は貪欲な所有欲から“Mending Wall”に見られるように、不必要な所に「壁」を作ったり、慣習法という目に見えない「壁」を作るのである。そうして、これらの「壁」によって彼等の肉体的精神的弱さを守ろうとする。これらの「壁」は「自然との戦い」に何らの戦力も加えず、反対に、人間の活動を束縛するものである。人間は自然の暴力と戦うと同時に、人間の精神的な弱さや人間性の底に潜む悪とも戦わねばならないのである。このような不利な戦いを続けて生きてゆくためには強力な精神的援助がぜひ必要となる。“The Death of the Hired Man”に於て、Warren は、なぜ老作男が戻ってきたかを考えないで、老作男の無価値を主張しているのである。

Mary は、無能な男は不要だという夫の意見を認めたくて、なおも老作男を優しく受け入れてやることを主張する。彼女は老作男が死にかけていながらも、仕事の計画を持って帰っている事を主張する。彼は仕事が出来なくなっているけれども、仕事に対する情熱は、なお持ち続けているのである。この事によって、彼は自己の存在価値を主張しているのである。このように死に瀕しながらも、まだ「自然との戦い」に執着している老作



男の自尊心を傷つけることなく、彼の孤独を少しでもやわらげてやるのが人間の純粋な気持であると Mary は主張しているのである。

さて、この詩には家庭についての重要な議論が見られる。夫は老作男が帰ってきた事や妻が彼を底うのを皮肉るように、逆説的に次のように言う。

‘Home is the place where, when you have to go there,  
They have to take you in.’<sup>6)</sup>

これは家庭を、食事や寝る場所などが与えられ、家族の者がいろいろな世話をしてくれる 便利な場所と 考えられては困る、と主張しているのである。家庭には、もっと大切な 機能があるのだと 夫は主張しているのである。妻は夫の考えを補って、次のように言う。

‘I should have called it  
Something you somehow haven’t to deserve.’<sup>7)</sup>

人間が家庭に住むに値いしないほど、家庭は大切な所なのである。妻も逆説的に言っている。人間が家庭に住むに値いしなければいけないほど、人間は家庭を必要とするのである。人間性の弱さや悪に敗れ、自然の圧力のまゝに “The Hill Wife” の妻のように敗北しないために、強い肉体を養い休息させると同時に、自然の圧迫と人間性の弱さや悪を克服して、幸福な生活を持とうとする強い精神力を養う所が家庭なのである。つまり、妻は彼等が自然の中におかれている位置、及び、人間の肉体的精神的弱さをよく知っているので、家庭の大切さを良く理解しているのである。老作男が兄弟の家に帰らないで、Warren 夫妻の家に帰ってきたのは、自然の圧力から避難し、精神的な慰安と援助を得ることが出来る場所として、Warren

6) *Ibid.*, p. 53.

7) *Loc. cit.*

夫妻の家を選んだからである。

以上の考察で明らかなように、Frost の初期の詩的世界における家庭は、人間が自然の暴力と人間性の弱さや悪と戦う為に作った小さな「砦」である。この「砦」は外側からは自然の暴力に攻められ、内側からは人間性の弱さや悪に攻められる。従って、この「砦」を難攻不落なものにするためには、家庭生活が最も重要なものとなる。特に家庭生活は精神的な援助を家族の全員に与えなければならないことを Frost は示唆している。

### 〔 3 〕

“The Hill Wife” に見られる妻は夫から何の援助も得られず、自然の圧迫と人間性の弱さに敗れたのであるが、“The Housekeeper” における妻は人間の作った社会的な圧力に敗北している。この詩は農夫 John の内縁の妻である Estelle が何も言わずに、突然に家出をしてしまったことについて、この家庭を訪問した作者自身と Estelle の母親である老婦人との間で交わされる対話の形式をとっている。

John は55才の農夫としては失格の男である。しかし、彼は Estelle を優しく扱い、二人の間では財産に関する争いも起らない。Estelle と彼女の老母も、こんな John を優しく世話する。このように表面的には彼等の家庭生活には何の欠点もない。それなのに、なぜ Estelle は家を逃げ出したのかと、問いつめる訪問者に対して、老婦人は John が正式に Estelle と結婚しなかったことを非難し、Estelle が他の男と結婚している事をほのめかす。John は Estelle にいつも次のように言っていたのである。

Better than married ought to be as good

As married—that's what he has always said.<sup>8)</sup>

---

8) *Ibid.*, p. 106.

このような彼の考えは観念的な理想論である。従って、彼は世間一般に受け入れられている結婚制度の束縛力の強さを理解しなかったのである。彼は“The Code”に見られるような、人間性の弱さや悪が作りあげた慣習法が支配している現実社会を見なかったのである。従って、彼は Estelle が社会の圧力に対して精神的に苦しんでいるのに気づかず、彼女を援助してやれなかったのである。彼等の家庭生活は、人間性の弱さにおし流され、実際にはいつのまにか、男と女の共同生活の便利さ、必要性のためにのみ存続しているだけになっていたのである。それだけに妻に去られたあとの John の生活は苦しいものとなるのは明白である。“The Hill wife”における妻の失踪は衝動的なものであるが、この詩における Estelle の家出は、彼女が置かれている社会的な位置を知的に認識したことに原因がある。

このように、Frost は「自然との戦い」に於ける「砦」である家庭が人間性の弱さや悪が作り出した敵からも攻撃されることを観察している。“The Hill Wife”では「砦」の内側から攻めていた人間性の弱さや悪は成長して、ここでは「砦」の外側と内側の両方から攻撃しているのである。

以上のように、Frost の初期の詩に見られる家庭は、自然の暴力と人間性の弱さや悪から、常に攻撃されている。このような攻撃に対して、人々は多くの場合、肉体で耐えている。例えば“A Servant to Servants”では、夫から精神的な援助を得られない妻が弱い肉体で必死に戦っている姿が見られる。彼女は夫が雇っている人夫達の食事の世話をするために、休む暇なしに働き続けなければならず、遂に詩の題名のように、召使い達の召使いとなってしまっている。彼女は過労の為に、精神的な危機に達し、彼女の叔父が精神異常者であり、自分も一度発狂したことがあるので、再

び、発狂するのではないかと恐れているのである。<sup>9)</sup> 妻が求めているのは、まず肉体の休息と、このような苦勞によって何をしようとしているのかという目的意識である。一方、夫は肉体が強健なために仕事に情熱を燃し、すべてのものの明るい面をのみ見るという楽天的な生活信条を持っている。従って、妻の肉体的な弱さと、肉体的な弱さがすぐ “The Hill Wife” に見られたような精神的な苦痛に発展することを理解出来ないのである。勿論、妻がいなくなると、彼の生活が維持できなくなるといふ事も見のがしている。

妻は “The Housekeeper” の Estelle のように、夫のもとから逃げ出そうと考えるが、人間をたえず狙っている自然の暴力と自分の肉体的な弱さをよく知っているので、仕方なしにとどまっているのである。つまり、彼女は知的に自分のおかれている位置を認識しているのであるが、この認識が「自然との戦い」に何の役にもたたないのである。彼女は「自然との戦い」において、肉体の弱さが生み出した精神的な圧迫に対して、貧弱な肉体で必死に戦っているのである。彼女の破滅は時間の問題である。

また、彼女の叔父が愛に絶望して精神異常になったらしいということは、家庭生活が与える精神的な慰安が愛に根ざしており、この夫婦は、その愛が欠けていたことを暗示している。夫は妻にあまり注意を払わないし、妻は夫に対して精神的な援助を求めているも、それを積極的に夫に主張していない。彼女はすでにあきらめてしまっているのである。

“The Fear” に見られる恐怖を、より深めているのも妻が肉体で耐えている姿である。一組の夫婦が夜中に、人里離れた一軒家に帰ってくる。その時、妻は暗闇の中に何か男の顔のようなものを見る。夫は何も見なかっ

---

9) Cf. Lawrance Thompson (ed.) *op. cit.*, p. x. Frost の妹の Jeanie が精神異常であり、Frost 自身も精神異常になるのではないか、という恐怖を感じていたという。

たと言うが、妻は異常なほど知りたがる。このような場合、闇に潜む男と対決するのは夫の仕事であるのに、妻は夫の制止を振り切って男と対決する。やがて、闇の中から子供を抱いた男が現われる。彼はただ散歩していただけなのである。このことを知って妻は安心し、精神の緊張がゆるみ、気を失うところでこの詩は終わっている。

彼女が暗闇に潜んでいた子供を抱いた男と、どうしても対決しようとした事は、この妻が以前に捨て去った家庭生活と対決しようとしたことを意味する。つまり、彼女は “The Housekeeper” において、夫から逃げた内縁の妻と同じような女であって、前夫と対決しようとしたのである。彼女には、一方的に軽々しく捨て去った家庭生活に対する良心の呵責が、いつもつきまとっているのである。それが “The Hill Wife” に見たような孤独感によって育てられ、前夫からいつも復讐の機会を狙われていると恐れるようになっているのである。しかも、彼女は前夫の復讐に対して、か弱い肉体で、一人で対決しようとしたのである。このような彼女の動物的な抵抗の姿が読者により深い恐怖を与えるのである。このような生活を送っている妻の破滅も時間の問題である。従って、“The Housekeeper” に見られた内縁の妻の逃亡後の生活も、この詩に見られる妻と同じように決して幸福なものとは考えられない。

“A Servant to Servants” と “The Fear” では、女性が肉体で戦っている姿が見られたが、このことは男性にとっても同じことである。“Snow” において、牧師の Meserve が降り積る雪の中を Cole 夫妻の制止をふり切って、家に帰るのも信仰のためではない。一家の主人である Meserve の肉体に、彼の家族の存亡がかかっているからである。Meserve が猛吹雪と戦って、家に帰れるだけの体力がなければ、彼の家族を養って行くこ

とが出来ないのである。<sup>10)</sup>

また、Meserve の妻が子供達の為にだけ、彼が生きて帰ってくことを望んでいたらしいということは、彼等の精神的な交流、愛が欠けていることを示し、彼等の家庭の崩壊を暗示している。今度は Meserve の肉体が耐え得たけれども、耐えられなくなると、この家庭はどうなるのであろうか？ しかも、ようやくたどりついた家庭が何らの精神的な慰安や援助を与えることが出来ないのである。

“The Death of the Hired Man” などの少数の例外はあるけれども、以上のように、Frost の詩に見られる家庭は、自然の暴力と人間性の弱さや悪と戦う課程において、妻が肉体的に弱いために、夫より先に肉体的精神的な危機に達し、夫から何の援助も得られないまま、仕方なしに肉体で動物的に戦い、敗北して、家庭が崩壊するという一つの類型をなしている。しかも、これらの家庭の妻たちは、多くの場合、愛による精神的交流の必要性を主張するが、彼女らは積極的に夫に働きかけないままに敗北して行く。ところが、既に見たように “The Death of the Hired Man” における妻は夫を積極的に説得し、老作男を保護してやろうとする余裕のある愛をもっている。だから、彼等の家庭は崩壊しないのである。

#### 〔4〕

いままでに検討してきた詩に見られる家族には、“Snow” を除いて、すべて子供がなかった。彼等の家庭生活は、何らの結晶も生み出さなかったわけである。“Snow” においては、Meserve の強い肉体が、かろうじて子供の生命を保護しているけれども、その肉体も長く続くとは考えられな

10) Meserve に沢山の子供があるという事は、彼自身がいかにも動物的であることを示している。つまり、彼の生活は肉体を土台としているのである。

い。即ち、彼等はすべて、次のような虚無の流れ、“The universal cataract of death/That spends to nothingness....”<sup>11)</sup> に、押し流されているのである。しかし、この流れに少しでも逆らおうとするのが人間の営みである。

It is this backward motion toward the source,  
Against the stream, that most we see ourselves in,  
The tribute of the current to the source.<sup>12)</sup>

このような抵抗の有力な拠点とならなければならないのが家庭生活なのである。

それでは、“The Death of the Hired Man”において、死に瀕している老作男が、長い道程を帰って来たような家庭はどのようにすれば持ちえるのであろうか？ この問題に対して Frost は“Home Burial”において、一つの可能性を示唆している。

この詩に見られる夫婦は、彼等の家庭生活の結晶である子供の死をめぐって鋭く対立し、ここでも家庭は崩壊の危機に直面している。実際に自分の愛児に死なれたことのある Frost にとっても、これは重要な問題であった。<sup>13)</sup>

この詩に見られる妻は、屋敷内にある子供の墓を見て、子供の死という悲しみに対して、身も心もささげるべきであると考ええる。

No, from the time when one is sick to death,  
One is alone, and he dies more alone.  
Friends make pretense of following to the grave,

11) Frost, *op. cit.*, p. 329.

12) *Loc. cit.*

13) Robert Frost の長男 Elliott が1900年7月に生後4年たらずで死んでいる。彼の死が Frost 夫妻に大きな苦しみを与えた。Cf. Thompson (ed.) *op. cit.*, p. 17.

But before one is in it, their minds are turned  
 And making the best of their way back to life  
 And living people, and things they understand.  
 But the world's evil....<sup>14)</sup>

このように彼女はとても感情的に、人間の孤独と人生の暗黒面を強調する。“Out, Out—”に見られるように、不注意から自分の手を失い死んでしまった少年に同情しながらも、感情に敗けなくて休むことなく戦いを続けて行かなければならない人間の姿に妻は耐えられないのである。

従って、鋤で軽々と土を掘り出し、子供の墓を作ったり、その時の泥がついたままの靴をはいて、次のような日常会話をした夫を彼女は理解出来ないどころか、恐ろしくて、一緒に暮らせせないという。

“Three foggy mornings and one rainy day  
 Will rot the best birch fence a man can build.”<sup>15)</sup>

この夫の言葉は Frost の描く詩的世界を象徴的に表わしている。人間は自然の暴虐と戦うために、必要な、又は不必要な、あるいは目に見えない「壁」を作る。このような「壁」をこえて、自然は独自の営み続けるのである。自然のまえでは、人間の力は水泡にすぎないのである。

夫にとっても子供の死は、とても悲しい、つらい出来事であるけれども、それに耐えなければ生きて行かれないという人間が自然の中に置かれていた状態を夫はよく知っているのである。いいかえれば、雨のために垣が腐ってしまうのと同じ次元で、人間の死をうけとめているのである。このような夫の考えを支えているのは、やはり、強靱な肉体である。

しかし、ここで注意しなければならないのは、大人や老人が死んだのではなく、愛の結晶としての子供が死んだという点である。夫の考えは基本

14) Frost, *op. cit.*, p. 72.

15) *Loc. cit.*



的には正しいとしてもあまりにも観念的でありすぎ、人間性を無視したものである。このことが彼の妻を感情的にし、人生の暗黒面を強調させているのである。

妻は家を出て行こうとする。ところが、この夫は既に見たような家庭生活の重要さを十分に知っており、また第三者が解決出来る問題ではないことを知っているの、彼はできるだけ冷静に話しあおうとする。しかも妻が何かに悩んでいたことには気付いていても、彼女が子供の死とそれに対する夫の態度に苦悩していたのを知らなかったことを夫は正直に認め、愛による精神的なたすけあいの必要性を主張する。

A man must partly give up being a man  
 With women-folk. We could have some arrangement  
 By which I'd bind myself to keep hands off  
 Anything special you're a-mind to name.  
 Though I don't like such things 'twixt those that love.  
 Two that don't love can't live together without them.  
 But two that do can't live together with them.<sup>16)</sup>

夫は妻の肉体的精神的な弱さに初めて気付いたのである。それで、少なくとも妻と一緒にいる時には、自然の暴力に対して、肉体で戦うという男の仕事はある程度放棄し、互いに精神的な交わりをする必要を感じたのである。家庭生活が精神的な安らぎを与えなければならないことに気付いたのである。そのためには、まず互いの愛情を通して、何の約束事も作らず、何のわだかまりもなく話しあうことによって愛を深め、自然の圧力に負けずに幸福な家庭をきずこうとする強い意志力を育てようと主張しているのである。

---

16) *Ibid.*, pp. 70—71.

この詩では、妻が家を出て行くか、行かないのか明白に示されていない。

‘If—you—do!’ She was opening the door wider.

‘Where do you mean to go? First tell me that.

I’ll follow and bring you back by force. I *will!*—’<sup>17)</sup>

これは、この詩の最後の部分であるが、イタリック体や感嘆符をまじえ、特に強められている。この夫の言葉には、家出をすることがこの問題の解決にはならない、という知的な態度と、力づくでも連れもどそうとする態度が見られる。このような夫の態度が、彼のしっかりとした自信と余裕を読者に感じさせる。しかも、この感じを与えているのは夫の強靱な肉体である。

強い肉体を持っていないと、相手のことを考える余裕が生れないのである。この余裕が精神的な交流を生み愛を高めるのである。このような愛が“The Death of the Hired Man”における妻のような大らかな愛に成長し、すぐれた家庭生活を生み出すのである。

さて、“Home Burial”に見られる夫の態度には、上に述べたような愛に成長する可能性を持った愛が見られる。まず、その愛は時には腕力に訴えることもあるほど活力に満ちている。また、その愛は「自然との戦い」を通して、即ち、大地といつも接触していることから生れた愛であるから、生命力に満ちた本能的な愛でもある。この詩における妻の孤独感や恐怖心は、夫の強い自信によって、とりはらわれるにちがいない。たとえ、彼女が出て行ってしまったとしても、夫は必ず彼女を連れもどすだろう。この夫婦は家庭の崩壊の瀬戸際で、愛による人間の可能性を発見したのである。勿論、彼等はこの問題を完全に解決したわけではない。夫は、互いに心からふれあうことが出来ない人間の孤独を十分に認識したうえで、それ

---

17) *Ibid.*, p. 73.

を現実として強い肉体で耐え、愛によって、少しでも魂の交流を可能にしようとしているのである。

## 〔5〕

いままで見てきた詩に見られる Frost の家庭生活の考察の基礎となっているのは、既に述べたように、自然の暴虐との戦いと、自然を出来るだけ利用しようとする人間の努力である。この見地から見ると人間性の弱さや悪との戦いも同時に考察出来るのであった。この二つの戦いは人間生活の本質でもある。従って、Frost の家庭生活の考察は New England の生活の考察であると同時に、人間生活の本質的な考察でもある。彼の描いた New England そのものが全世界の代表としての一つの世界となっているのである。つまり Frost の詩的世界それ自体が、synecdoche (提喻法)<sup>18)</sup> となっているのである。

この Frost の詩的世界に見られる家庭生活は、少数の例外を除いて、すべて自然の暴力や人間性の弱さや悪のまゑに挫折し、崩壊して行く課程が描かれており、読者に暗いかげをなげかけてきた。しかも、多くの場合、人間が知的に考え出した時、家庭の崩壊が生れている。“A Servant to Servants” や “The Housekeeper” などの詩に見られる妻たちのように、肉体の弱さや人間性の弱さと悪が、人間が自然や社会に置かれている位置や状態を知的に考えさせるのである。この知的活動が家庭生活の大切さ、及び精神的な助け合いの必要を自覚させるのである。しかし、その時には

---

18) Cf. E. S. Sergeant, *Robert Frost: The Trial by Existence* (New York: Holt, Rinehart and Winston, 1962), p. 178: “I believe in what the Greeks call synecdoche; the philosophy of the part for the whole; skirting the hem of the Goddess”.

既に、自然の圧力のために肉体が敗北してしまっているのです、知性は人生の暗黒面を強調させる。また、肉体でかろうじて耐えている時は精神的援助の必要を痛感させるが、それも否定的な方向に進展し、愛による精神的な交流さえ人間は持てないのだという絶望へと発展する。従って、愛による精神的な援助の必要性を自覚させるのは知性なのであるが、強靱な肉体がなければ人間の精神的交流が愛を高める余裕がなく、人生の否定へと導いてしまうのである。つまり、この知性の相反する働きを統一しているのが強靱な肉体でなければならないのである。

強い肉体が生み出す自信と余裕は、人間の精神的な交流を可能にし、“Home Burial”に見られたような愛、時には暴力を伴うほどの活力に満ちた愛を生み出すのである。しかも、この愛は知的活動がその必要性を見出したものではあるが、決して知的な宗教的な愛ではない。それは「自然との戦い」を通して、常に自然と密接な関係を持ち続けているところから生れた本能的な、動物的な愛である。また、人間性の弱さや悪との戦いのために、協力者をひきとめておこうとする egoistic な愛でもある。

しかし、この愛がたかめられ、“The Death of the Hired Man”における Mary のような深い愛や、[瀕死の老作男が精神的な慰安を求めて、文字通り死をかけて帰ってくるような家庭を育てる可能性をもっている]のである。このような愛が大きな虚無の流れ “The universal cataract of death/That spends to nothingness....”<sup>19)</sup> に逆らおうとする人間の営みを可能にし、難攻不落の「砦」での幸福な家庭生活を可能にするのである。つまり、Frost は身近かな New England における家庭生活の観察から、以上に述べたような粗野な生命力に満ちた愛による人間の可能性を見出したのである。

——関西学院大学文学部助手補——

19) Frost, *op. cit.*, p. 329.